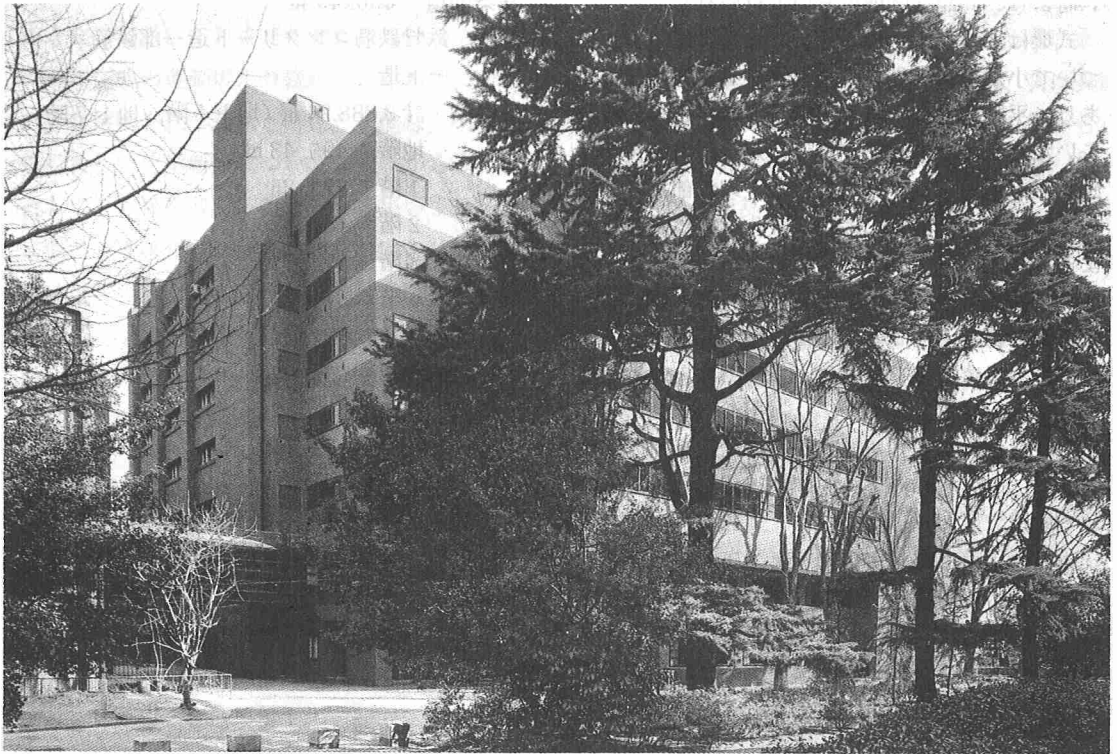


# 廣報

東京大学理学部

化学新館



## 目次

表紙の説明	1
化学新館について	大木道則 2
化学新館完成によせて	赤松秀雄 4
学部長と理学部職員組合との交渉(2~4月)	6
〈学部消息〉	6

## 化学新館竣工式典

本郷キャンパスの安田講堂（時計台）裏の旧施設部（地震研究所）跡に、たいへんモダンな建物（既報：理学部広報、13巻5号、昭57、1月）がこのほど完成し、若葉に映えている。

この建物が化学教室と地殻化学実験施設の研究実験棟で、化学新館と命名され、従来の化学新館が化学本館に改名された。

化学新館の竣工披露式典は、さる3月17日（木）14時より、同館玄関前において行われた。

式典は、先ず江上理学部長の挨拶にはじまり、ついで小泉施設部長から同建物の工事経過報告があり、平野総長並びに木村健二郎教授からの祝辞をいただき、工事関係4業者に対し、学部長から感謝状を贈呈し、平野総長、江上理学部長、佐佐木化学教室主任並びに佐藤地殻化学実験施設長による開館のテープカットを行った。つづいて平野総長、篠澤事務局長や名誉教授を先頭に館内をご案内し、15時より同館に隣接の理学部4号館3階会議室会場にて祝宴を催し、17時頃に自然散会した。

本式典には学部外招待者約150名、学部内関係者約150名の約300名の出席を得て、本館に相応しく盛況であった。

本館の工事に際し、化学関係の研究室はとくに化学薬品を使用する関係上、その研究・労働環境

の保全と防災の問題には非常な配慮がほどこされ、この設計、施工及び内部設備の予算措置等について関係方面の方々の御理解となみなみならぬ御協力をいただいたことに対し深甚の謝意を表するとともに今後、本館がひろく理学の発展に寄与することを期待するものである。

因に化学新館の概要はつぎのとおり。

工期 着工昭和56年9月 竣工昭和58年2月

建築面積 590.49㎡

構造 鉄骨鉄筋コンクリート造一部鉄筋コンクリート造

延面積 計3,888.24㎡（地下1階，地上7階）

地階 495.43㎡

1階 373.25

2階 468.12

3階 574.77

4階 574.77

5階 574.77

6階 550.95

7階 173.47

屋上階 102.71

高さ 押え地盤よりパラペット上端まで

27.446m

エレベータ 1基 460kg/min方向性乗合全自動



## 化学新館について

大 木 道 則 (化学)

理学部広報13巻5号でお知らせした化学教室の約半分と地殻化学実験施設の約 $\frac{1}{2}$ を収容する理学部の新しい建物がこのほど完成し、3月中に、移転もほぼ完了しました。この建物の完成に伴い、保存されることとなった大正5年完成の古い化学館を化学旧館、これまで化学新館と呼んでいた昭和37年完成の運動場より建物を化学本館、新しくできた建物を化学新館と呼ぶことになりました。この新しい化学新館について、化学からみた記録として、本稿を残しておきたいと思います。

前にも書きました通り、化学教室としては、将来は現在化学旧館と呼ばれる部分を取り壊して、そこに化学教室の新しい建屋を建てつもりでした。したがって、化学本館は、化学旧館の方にはつながりがよくなっていますが、化学新館の方には延長しにくいづくりをしています。もともと、そのうち旧地震研究所の建物は理学部のものになるだろうとの考えがありましたから、1階、地階はすぐにでも旧地震研とつながるようになっていましたが、2階、3階は学生実験室、4階は図書室、5階は講堂です。そこに廊下を作って化学新館とつなげることは事実上不可能です。したがって、化学新館が現在の位置にできるとすると、それは化学教室にとってあまり便利なものにならないというおそれがありました。このような理由で、化学教室としては、あくまで化学旧館を取り壊して改築をしたかったのですが、全学のマスタープラン委員会において化学旧館を保存することが決定され、不本意ながら、旧地震研跡に化学新館を建設することに同意したわけです。

設計の段階においてもいろいろの問題がありました。その第一は設計家(建築家)と実際に住むわれわれとの意見の違いです。建築家は、大講堂

の裏手の風致地区ということで、あくまでも外観を大事にします。それで最初は壁が曲面となった設計ができあがりました。しかし、そうなっても資格面積が別に増えるわけではありません。外観のためにデッドスペースができることは化学にとっては損失ですから、随分と強い意見も言いました。化学新館が一部7階になったのも、実は美観上のためです。4号館の壁面が大講堂の側から見ると見苦しいから、それをカバーする必要があるというのが建築家の意見でした。非常階段が化学本館のそれとつながったのも、苦肉の策といえはその通りですが、その全壁面にタイルを貼って外観をよくするという点も見逃せない理由です。そして、タイルの色が縞模様になっているのは、東大にはなく他でも珍しいようですが、これも化学旧館、化学本館と1号館、4号館との色の調和をとろうとした苦心の結晶です。第二は、施設部の「化学旧館では、改装の後も化学実験をしないようにしてほしい」という要請を受けて、化学実験室を全て化学新館に移そうとしたことです。このために、化学としては希望していなかった、地上6階、一部7階という現状の建物を受け入れざるを得ませんでした。そして、化学新館に新しい階段が作られないことになったのも、ここに原因があったわけです。

以上のように、化学としては新館と本館、ひいては旧館との連絡の悪さなど不満の面はありますが、設計においては、随分とわれわれの言い分を聞いていただきました。時間は随分使いましたが、ここに建てなければならぬという制約のもとでは、ほぼ満足できる建物になったと思っています。

内部設備についても、いろいろな問題がありま

した。まずドラフト・実験台・家具の問題です。このような建物内の設備・備品を購入する費用のことを建新（たてしん）というそうですが、文部省からくる建新は1㎡あたり3000円しかないというのです。化学新館の面積は4000㎡たらずですから、これでは1200万円にしかなりません。これではドラフトをつけるだけでも無理です。古い物でも使っている物は移転して使えということですが、化学旧館にあるドラフトや実験台は作りつけのものが多く、運ぶことは不可能なのです。これらを見積ると、どうしても1億円を越してしまうのですが、労働環境基準から言っても、ドラフトなしで実験というわけにはいきません。化学としては、最悪の場合には募金も必要かとの話もありましたが、事務局の大変な努力によって、ドラフト・実験台・家具什器をはじめ、移転の費用も国費でまかなうことができました。化学教室としては、この場をかりて、事務局に厚くお礼申し上げたいと思います。

建物を作るについてのもう一つの深刻な問題は、事務局から文部省へ要求する建物の種類が校舎であって、化学実験棟を建てるというものでない点です。これは上述の建新にも反映されているのだと思いますが、校舎というのは、要するに入れ物を作るというだけのことです。しかし、御存知のように、化学実験には火災などの危険が伴いがちですし、また地震の対策も考えておかねばなりません。近年、消防署はこの点で随分と神経質になっています。これまで消防署の立入検査があるたびに薬品の整理などに追われていたのですが、新しい建物ができるについては、皆が安心して実験

のできる状況にしたいと考えたわけですから。これには、消防法にいう一般危険物取扱所にする必要があります。ところが、この一般危険物取扱所になるための要件の費用が校舎の予算では出ないし、会計検査でも過剰設備ということにならないかというわけです。この問題解決のためには、事務局・施設部を随分悩ませましたが、われわれも何回も消防署にでかけて説明し、消防庁からも特別の配慮を得て、一般取扱所が正式に発足しました。ここに御迷惑をかけた各方面におわびとお礼を申し上げます。

以上のように、今回できた化学新館は、いくつかの不満を残しながらも、化学教室としてはほぼ満足のものになったのではないかと思います。4号館と化学新館の間が鉄扉で常時しまっているというのは、慣れるまでは少々異常かも知れませんが、化学特有の臭気が4号館にいきにくいという点ではメリットがあるでしょう。もちろん、化学としてもドラフトの完備によって臭気をもらさないようにはしていますが、世界共通の「化学の臭い」はいたし方ないものと思います。これまでも建築・移転で物理教室には御迷惑をおかけしていますが、建物の廊下もつながったことですので、今度ともよろしくお願ひしたいと思います。

最後に、今後の問題点を考えてみますと、中水道をつけたことによって、理学部には水道料金で貢献ができると思いますが、常時稼働のドラフトをも含めた電気料金は大きな問題だと思います。建物もそうでしたが、ランニングコストも特別の配慮がされるよう関係方面に働きかけることが必要と思われれます。

## 化学新館完成によせて

—今後化学本館とよばれる建物について—

赤松秀雄(名誉教授、化学)

大正12年の関東大震災は本郷キャンパスのイメージを一変したにちがいない。明治大正期を代表した煉瓦造りの建物は崩壊し、そのあとに現在みられるネオ・ゴシック風の建物群が生まれた。そのなかで、化学教室の古風な建物を取り残されたものの如く目をひく。大正5年に建造されたこの建物は、実は煉瓦造りではなくて当時としては最新の鉄筋コンクリート造りで煉瓦色のタイルを貼ったものであり、地震に耐えて残ったのである。ひとり大学構内のみでなく、広く東京をみわたしても、古い建物が震災と戦災によって尽く失なわれた今日では、これは最も古いコンクリート造りとしても、また大正初期の風格ある面影を完全に保つ建物としても唯一のものであろう。玄関を中心として鳥が翼を張ったような姿は壮麗でさえある。その前の両側には2本のヒマラヤ杉が亭々としてそびえているが、理科大学化学館として竣工した当時の写真では未だ幼い姿である。当時の学生数は1クラス10名にみたない。教授陣は池田菊苗、松原行一、柴田雄次の3先生であった。その頃の雰囲気かしのばれるのである。

筆者が入学した昭和7年当時は、化学科の入学試験には分析化学の実験が課せられた。その試験場が、かつて“新館”、その後“旧新館”とよばれた物理1号館に面した建物である。その二階に分析化学の学生実験室があって、4人分に仕切られた実験台が6台あり、1クラス24名の学生を収容することができた。これが学生定員を規制する基になっていた。当時は別に控え室があるわけではなく、学生にとっては銘々の実験台が大学における居所でもあった。この建物は、大正12年に建造されたのであるが、理科大学が理学部に改編され

たのが大正8年であって、その頃から学生の数も次第に増していることから、増築されたものであろう。

それ以来40年に近い歳月が流れていた。その間には戦前、戦中、戦後の激動の時期が含まれている。戦時中は1クラス30名を越す学生を収容せねばならなかった。昭和24年新制度の出発にあたって学生定員を24名に戻したが、他方新制大学院制度の発足により、当時8講座で引き受ける大学院学生の数はにわか急増するようになった。さらに新しい実験機器が次々に出現し、その発達と相まって実験設備を収容する面からも教室の狭隘に対する不満は年毎にましていたのである。それは化学に限ることではなく、広く科学の各分野において研究を発展させるための将来計画がようやく真剣に論議されるようになったのである。一方社会的には、1960年代の経済高度成長の時期を迎えようとしていたから、理工学系の学生の増員が強く要望されるに至った。

たまたま化学教室の発祥が文久元年(1861)幕府の洋書調所に精煉所が設けられたことに起源をもつところから、その百年の記念事業として、時代の発展に即応するよう教室を増築し、合せて学生の増員をはかるべしという案が卒業生の間に起った。その結果百年記念東大理学部化学教室増築期成会(会長柴田雄次名誉教授)が設けられ寄附金を募り、新館を建築して大学に寄贈することとした。この計画は当時の社会的情勢に適合していたので各方面の賛同と支持を得て順調に進行し、昭和36年(1961)10月に地鎮祭を行ない翌年には建物の完成をみたのである。これが運動場に面した、これまで新館とよばれていた建物である。

その結果化学教室では従来の8講座に新たに4講座(天然物有機化学、無機合成化学、化学反応学および物理有機化学)を加え、学部学生定員を45名に増加することができたのである。

増築にあたっては化学教室の将来の発展も考慮したうえで、旧館の左翼をのぼす位置としたのであるが、そこには極めて特殊な建造物があったのである。それは驚くほど強固な建造物でこれを撤去するのに手をやいた。そこには、かつて日本のメートル原器がおかれていたとも言われるが詳かでない。たしかなことは、そこが日本における重力測定の原点であることである。新館の建築にあたっては特に地下2階を設けてその位置を保存している。重力加速度の値、 $g = 9.7978869 \text{ m/S}^2$  というのは、この地下原点室における値である。

ところで、この建物は地下1階地上5階合せて約3830  $\text{m}^2$ であるが増築の趣旨が学生の増加をはかることであったから、その機能を主として学部教育の場に重点をおいて設計した。たとえば、各クラスがそれぞれのフロワーで授業をうけられるように、学生実験室に接して講義室・準備室を配置したほかにクラス毎に専用の学生控室を設けて学生の居所とした。4階の図書室は書庫を含めて430  $\text{m}^2$ ある。5階はすべて講堂(250席)にあて、ロビーを広くした。総体にこの建物は大学としては空間的にゆとりのある設計である。このように自由な設計ができたのは寄附によって建てたからで、政府予算では許されないであろう。政府予算では1講座あたり500  $\text{m}^2$ (当時)の割合という規

準があったが、そのことは特に気にかけずに建てたのであった。これは後日理学部教授会で問題になったのである。この建物を含むと化学教室のみでなく理学部全体としてみて規準をオーバーするので、他学科の増築の妨げとなるという見解である。建物自体を寄附したのであるから、そのようなケチなことは言はなくてもよさそうに思えたのであるが、筆者は暗然として貧しさの悲哀をしみじみ感じたものである。それは大学行政に関する貧困の故である。しかしこのような感情は筆者のみでなく、また化学教室に限ったことでもなく、おそらく理学部全体で感じたことであろう。研究環境を改善し時代の進展に即応するため何らかの方針を立てなければならないという共通の意志が理学部全体にもみられた。理学部将来計画のための委員会も生まれた。その背景には1960年代の経済高度成長の波が直接間接に学問の世界をもゆさぶったことは事実である。

それから20年の歳月が流れている。その間理学部の研究環境も建物についてみると大分改善されたようである。この一連の計画に沿って本年は新しい化学新館の完成をみたことを特にうれしく思う者である。これによって、従来の新館は化学本館とよばれることになった。歴史の歯車は1つ進んだのである。また旧館は記念のため保存されるとき。いつの日かこれが重要文化財となる日があることを心中ひそかに思っている。化学新館の完成によせて、昔のことを思い出して綴った次第である。(1983・4・25)

毎月1日は

「省エネルギー」

の日です。

## 学部長と理学部職員組合との交渉（2～4月）

標記の交渉は、様々な議題でおこなわれたが、紙面の都合上重要なもののみ掲載する。

### ①公用旅券における「助手」の英文訳について

教授会で「助手の英文訳を assistant にするのは適切でない。他の訳語を用いて、公用旅券を申請してよい。」ことになったと学部長より報告があった。

### ②助手の休職期間の短縮について

学部長より「学部全体で教官の空ポストがある場合は、短期間なら勤続手当支給月の休職扱いを

避けるよう努力したいので、該当者は申し出られたい」と検討結果が報告された。

### ③期限付定員外職員の継続雇用について

学部長は「該当者が、事実上継続雇用されるよう努力をつづけている」と報告した。理職は、文部省がこの件では大学の自主的判断を尊重すると国会で答弁していることを紹介しつつ、学部長の一層の努力を要望した。

## 〈 学部消息 〉

### 教 授 会 メ モ

#### 3月16日(水)定例教授会

理学部4号館1320号室

- (1) 前回議事録承認
- (2) 人事異動等報告
- (3) 昭和57年度卒業業者決定の件
- (4) 研究生の入学について
- (5) 研究生の研究期間延長について
- (6) 昭和58年度奨励研究員の受入れについて
- (7) 昭和58年度受託研究員の受入れについて
- (8) 人事委員会報告
- (9) 会計委員会報告
- (10) そ の 他

なお、当日寺山教授、佐々木(巨)教授ならびに江橋教授の3教授のご退官にあたり、記念撮影(化学教室旧館中庭)及び送別の会(午後5時30分より、学士会分館・赤門脇)が教授会終了後に開催された。

#### 4月27日(水)定例教授会

理学部4号館1320号室

- (1) 前回議事録承認
- (2) 人事異動等報告
- (3) 研究生の入学について
- (4) 昭和58年度奨励研究員の受入れについて
- (5) 人事委員会報告
- (6) 会計委員会報告
- (7) 教務委員会報告
- (8) 企画委員会報告
- (9) 東京大学遺伝子実験施設理学部運営規則について
- (10) そ の 他

(次回以降予定：5月18日(水)13時30分より)

6月15日(水) 同 上  
7月20日(水) 同 上  
8月 休 会

## 遺伝子実験施設理学部運営規則

4月27日(水)教授会において、東京大学遺伝子実験施設理学部運営規則が承認された。

この規則は、本年4月に本学共同利用施設として設置された東京大学遺伝子実験施設の運用に関連したものである。

本施設の設置に伴い、遺伝子にかかわる組換えDNA実験を利用した研究・教育の躍進がおおいに期待されよう。

制定された規則はつぎのとおり。

### 東京大学遺伝子実験施設理学部運営規則

(設置及び目的)

第1条 東京大学理学部における遺伝子実験施設(以下「施設」という。)は、東京大学遺伝子実験施設規則(昭和58年4月19日制定)了解事項に基づき、組換えDNA実験を利用した研究・教育を行うとともに、理学部における組換えDNA実験の促進と安全の確保をはかることを目的とする。

(施設長)

第2条 施設に施設長をおく。

2 施設長は、専任の東京大学理学部教授のうちから理学部教授会において選出する。

3 施設長は、施設を代表し、その所務をつかさどる。

4 施設長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(協議会)

第3条 理学部に、施設の管理及び運営に関する重要事項を審議するため、協議会を置く。

2 協議会は、理学部長、理学部評議員1名、施設専門委員会委員長、理学部長の委嘱する学識経験者若干名及び施設長をもって組織する。

3 議長は、理学部長をもってあてる。

4 理学部長の委嘱する学識経験者である委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

5 前項の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(専門委員会)

第4条 施設に、施設の有効な運用をはかるため、専門委員会を置く。

2 施設の運営は、専門委員会の審議した方針に基づいて行う。

3 専門委員会は、委員長及び委員若干名をもって組織する。

4 委員長は、委員の中から互選する。

5 委員は、理学部の教授、助教授、専任講師及び施設の助教授のうちから協議会の議を経て、施設長が委嘱する。

6 委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

7 前項の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。



(議 事)

第5条 第3条及び第4条の会議は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開き、議決することができない。

2 会議の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長及び委員長の決するところによる。

(事務室)

第6条 施設の事務を処理するために、事務室を置く。

附 則

1 この規則は、昭和58年4月27日から施行し、昭和58年4月1日から適用する。

2 第3条及び第4条の規定にかかわらず最初の委員の任期は、昭和60年3月31日までとする。

なお、本規則による協議会委員及び専門委員会委員はつぎのとおりである。

〔協議会委員〕

〔専門委員会委員〕

江上信雄 教授(動物学)・学部長  
 田村一郎 教授(数学)・評議員  
 飯野徹雄 教授(植物学)・全学施設長  
 岡田吉美 教授(生物化学)  
 和田昭允 教授(物理学)

飯野徹雄 教授(植物学)  
 堀田凱樹 助教授(物理学)  
 溝淵 潔 助教授(生物化学)  
 鈴木秀穂 助教授(植物学)

## 人 事 異 動 報 告

(講師以上)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
化 学	助教授	宮 本 健	58. 3. 16	昇 任	化学科助手より
物 理	教 授	清 水 忠 雄	58. 3. 16	"	物理学科助教授より
"	"	鈴 木 増 雄	"	"	"
化 学	助教授	池 本 勲	58. 3. 31	辞 職	東京都立大(理)・教授へ
物 理	教 授	山 口 嘉 夫	58. 4. 1	配置換	東大(原子核研)・教授へ
地 物	助教授	斎 藤 正 徳	"	昇 任	神戸大(理)・教授へ
生 化	講 師	大 野 哮 司	"	"	東京農工大(農)・助教授へ
"	助教授	大 野 哮 司	"	併 任	本務:東京農工大(農)助教授
植物園	教 授	岩 槻 邦 男	"	配置換	京大(理)・教授より
地 物	"	熊 沢 峰 夫	"	昇 任	名大(理)・助教授より
化 学	助教授	内 藤 周 弑	58. 4. 16	"	化学科講師より

所 属	官職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
天 文	助教授	吉 村 宏 和	58. 4. 16	昇 任	天文学科・助手より
植物園	教 授	岩 槻 邦 男	58. 4. 1	併 任	植物園長(～61. 4. 1)
臨 海	"	木 下 清一郎	"	"	臨海実験所長(～61. 4. 1)
化 学	"	黒 田 晴 雄	"	"	分光化学センター長 (～60. 4. 1)
素粒子	助教授	須 田 英 博	"	"	本務：東大宇宙線研究所・ 助教授
"	教 授	武 田 暁	"	"	本務：東北大(理)教授
"	"	菅 原 寛 孝	"	"	本務：高エネ研教授
"	助教授	高 崎 史 彦	"	"	本務：高エネ研助教授
中間子	教 授	南 園 忠 則	"	"	本務：阪大(理)教授
"	助教授	谷 川 庄一郎	"	"	本務：筑波大助教授
地 物	教 授	伊 藤 富 造	"	"	本務：宇宙科学研教授
"	"	大 林 辰 蔵	"	"	本務：同 上
物 理	"	田 中 靖 郎	"	"	本務：同 上
"	"	高 柳 和 夫	"	"	本務：同 上
"	"	西 村 純	"	"	本務：同 上
地 物	"	西 田 篤 弘	"	"	本務：同 上
物 理	"	清 水 幹 夫	"	"	本務：同 上
"	助教授	河 島 信 樹	"	"	本務：宇宙科学研助教授
"	"	小川原 嘉 明	"	"	本務：同 上
"	"	松 岡 勝	"	"	本務：同 上
地 物	"	中 村 良 治	"	"	本務：同 上
動 物	教 授	寺 山 宏	58. 4. 2	停年退官	
物 理	"	佐々木 亘	"	"	

(助 手)

所 属	官職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
物 理	助 手	大 門 寛	58. 3. 16	昇 任	物性研・技官より
人 類	"	佐 藤 俊	58. 3. 31	辞 職	立教大(文)・講師へ
植 物	"	北 潔	"	"	順天大・助手へ
化 学	"	清 水 真	58. 4. 1	採 用	
物 理	"	小 玉 英 雄	"	"	
人 類	"	長谷川 真理子	"	"	
数 学	"	木 村 弘 信	"	"	
"	"	深 谷 賢 治	"	"	
地 理	"	松 本 淳	"	"	

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
地質	助手	大路樹生	58. 4. 1	採用	
物理	"	島信幸	"	転任	分子科学研・技官より
中間子	"	山本明	"	併任	本務：高エネ研助手
化学	"	浅見真年	"	昇任	横浜国大(教育)・助教授へ
物理	"	新井一郎	"	"	筑波大(物理学系)・講師へ
地物研	"	鈴木勝久	"	"	横浜国大(教育)・助教授へ
数学	"	宮地晶彦	"	"	一橋大(社会)・講師へ
物理	"	梶田晃示	58. 4. 16	辞職	東邦大・助教授へ
地質	"	小澤一仁	58. 5. 1	採用	

(職員)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
物理	技官	真下清孝	58. 3. 20	辞職	日立化成へ
"	"	広海裕子	58. 3. 31	"	
事務	事務長	田村文雄	58. 4. 1	勸奨退職	
物理	技官	荒井正男	"	"	
動物	用務員	今宮幾誉	"	"	
物理	事務官	榎野幸子	"	転任	山形大(医)へ
"	技官	渡辺重夫	"	採用	
"	"	石川悦子	"	転任	基礎生物研より
"	教務職員	田中万博	"	採用	
事務	事務官	阿部禎辰	"	配置換	人事課より
情報	"	村田順子	"	転任	長岡技科大より
事務	事務長	石渡昭男	"	配置換	地震研より
物理	事務主任	下野茂	"	転任	東京外語大より
事務	大学院掛主任	伊藤邦範	"	昇任	教養学部より
"	事務官	野田恭二	"	配置換	人事課へ
"	"	小林政和	"	昇任	薬学部、大学院掛主任へ
"	大学院掛	鹿又仁郎	58. 5. 1	採用	

## 教室主任・施設長等名簿

(昭58. 5. 1現在)

教室・施設名等	教室主任・ 施設長等氏名	電話番号	備考
数 学 教 室	藤 田 宏	4 0 4 3	
情 報 科 学 教 室	米 田 信 夫	4 1 1 5	
物 理 学 教 室	宮 沢 弘 成	4 1 3 3	
天 文 学 教 室	堀 源一郎	4 2 5 7	
地 球 物 理 学 教 室	永 田 豊	4 2 8 8	
化 学 教 室	高 橋 武 美	4 3 5 6	
生 物 化 学 教 室	宮 沢 辰 雄	4 3 9 1	
動 物 学 教 室	水 野 丈 夫	4 4 3 1	
植 物 学 教 室	古 谷 雅 樹	4 4 6 9	
人 類 学 教 室	埴 原 和 郎	4 4 8 5	
地 質 学 教 室	飯 山 敏 道	4 5 1 4	
鉱 物 学 教 室	竹 内 慶 夫	4 5 4 2	
地 理 学 教 室	鈴 木 秀 夫	4 5 7 5	
臨 海 実 験 所	木 下 清一郎	(0468)81-4105~7	
植 物 園	岩 槻 邦 男	814-0138~9	
地 球 物 理 研 究 施 設	福 島 直	4 5 8 1	
分 光 化 学 セ ン タ ー	黒 田 晴 雄	4 3 3 1	
中 間 子 科 学 実 験 施 設	山 崎 敏 光	4 2 3 3	
地 殻 化 学 実 験 施 設	佐 藤 良 輔	4 2 9 3	
素 粒 子 物 理 学 国 際 協 力 施 設	小 柴 昌 俊	4 2 3 1	
遺 伝 子 実 験 施 設	飯 野 徹 雄	4 4 6 5	
学 部 長	江 上 信 雄	4 0 0 0	
評 議 員	田 村 一 郎	4 0 4 4	
評 議 員	海 野 和 三 郎	4 2 5 5	
事 務 長	石 渡 昭 男	4 0 0 1	
事 務 長 補 佐 (総 務 担 当)	神 予 和 雄	4 0 0 2	
事 務 長 補 佐 (経 理 担 当)	福 井 保 男	4 0 0 4	
学 務 主 任	三 浦 俊 暁	4 0 0 3	

## 久城育夫教授

### 米国科学アカデミー外国人会員に

飯 山 敏 道 (地質)

米国科学アカデミーは、昭和58年4月26日地質学教室久城育夫教授を外国人会員として選出したことを公表した。

久城教授は、火成岩の源であるマグマの成因および、マグマの性質と発生の場との関係についての実験的研究により、世界の岩石学の進歩に多大の貢献をされた。最近では、マグマの物性について注目すべき研究をされている。

今回米国科学アカデミーは、ソ連、ニュージー

ランド、スイス、仏、英、日、伊、スエーデン、濠の9ヶ国から12人の外国人会員を選出、これにより、同アカデミーの会員は216人となった。

日本人では、久城教授の外、ジョンホプスキンス医科大学の石坂教授（微生物学）が選出された。理学部一同、久城教授にお祝いの意を表すると共に、今後の御研究の発展を祈る次第である。

## 外国人客員研究員報告

所 属	受入れ 教 官	国籍	氏 名	現 職	研究員期間	備 考
数 学	落合助教授	アメリカ	Jerry L. Kazdan	ペンシルバニア大学 教 授	58. 6. 1 / 58. 7. 31	日本学術振興会 外国人招へい研究 者
化 学	田丸教授	東ドイツ	Hans Miessner	東ドイツ科学アカデ ミー物理化学中央研 究所研究員	58. 3. 15 / 58. 6. 12	日本学術振興会 東ドイツ科学アカ デミーとの科学者 交流事業
化 学	田丸教授	中 国	Zhai Runsheng	大連化学物理研究所 研究員	58. 6. 1 / 59. 3. 31	
数 学	塩田助教授	アメリカ	Nicholas M. Katz	プリンストン大学 教授	58. 5. 1 / 58. 7. 31	日本学術振興会 外国人招へい研究 者
人 類	尾本教授	中 国	杜 傳 書	中山医学院 教授	58. 5. 16 / 58. 6. 15	日本学術振興会 外国人招へい研究 者
化 学	不破教授	中 国	褚 家 成	中国交通部科学研究 院水運研究所 工程師	58. 4. 1 / 60. 3. 31	中国政府派遣 研究員
化 学	朽津教授 近藤助教授	アメリカ	A. J. YENCHA	ニューヨーク州立大 学アルバニー分校 準教授	58. 5. 16 / 58. 6. 24	日米科学協力事業 協力研究

## 東京大学職員の永年勤続表彰

昭和58年4月1日付で退職される職員に対する総長表彰状が3月31日(木)正午から学部長室において江上学部長から伝達された。(田村事務長は前日総長から授与)

被表彰者      事務部      田村文雄  
動      物      今宮幾誉

### 海 外 渡 航 者

3      月

所属	官職	氏名	渡航先名	渡航期間	渡航目的
数 学	助 手	真 島 秀 行	アメリカ合衆国	3. 22~6. 22	微分方程式の特異点に関する研究のため
天 文	助 授 授	吉 村 宏 和	アメリカ合衆国	3. 1~10. 31	太陽磁気活動に関する研究のため
鉱 物	助 授 授	武 田 弘	アメリカ合衆国	3. 12~3. 27	第14回月・惑星科学会議、国際隕石学会評議員会出席及び隕石・月試料中の鉱物に関する研究連絡のため
情 報	授 授	山 田 尚 勇	中華人民共和国	3. 15~4. 14	情報工学に関する研究のため
物 理	助 授 授	永 宮 正 治	アメリカ合衆国	3. 11~3. 30	高エネルギー重イオン衝突における集団流の存在についての調査研究のため
化 学	授 授	向 山 光 昭	アメリカ合衆国	3. 19~3. 28	アメリカ化学会年会出席及び有機合成化学に関する調査研究のため
植 物	助 授 授	鈴 木 秀 穂	ドイツ連邦共和国	3. 12~3. 19	細菌細胞壁のムレイン・サキュルスに関する国際シンポジウム出席のため
情 報	助 授 授	榎 本 彦 衛	アメリカ合衆国	3. 14~7. 29	情報科学に関する共同研究のため
物 理	助 手	押 山 淳	アメリカ合衆国	3. 27~ 59. 3. 26	半導体中の欠陥及び不純物の理論的研究のため
地 物	助 手	宮 田 元 靖	大 韓 民 国	3. 16~4. 5	沿岸における長周期波の研究実施のため
物 理	助 手	東 島 清	アメリカ合衆国	3. 31~8. 10	理論物理学の研究及びレプトン・フォトン相互作用に関する1983年国際会議出席のため
地 物	助 手	松 井 孝 典	アメリカ合衆国 カナダ	3. 9~3. 30	第14回月・惑星科学会議出席及び高速衝突実験のため
地 質	授 授	飯 山 敏 道	マレーシア	3. 19~3. 27	地質調査のため
物 理	助 授 授	江 口 徹	デンマーク	3. 21~6. 13	高エネルギー理論物理学に関する調査研究のため
物 理	授 授	山 崎 敏 光	アメリカ合衆国 デンマーク	3. 18~3. 25	K中間子崩壊ワークショップ出席及び物理研究のための国際的フェンリテンシンポジウム出席のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
地物研	助教授	小川利紘	インド	3. 6~3. 18	インドにおける中層大気ロケット観測調査のため
物理	助手	清水清孝	イタリア、ドイツ連邦共和国	3. 30~5. 30	エリーチェ原子核物理国際学校出席及び原子核理論に関する共同研究のため
化学	助手	梅澤喜夫	ハンガリー	3. 31~4. 29	イオン選択性電極のメモリー効果に関する基礎的研究実施のため
物理	助教授	若林健之	オーストリア、連合王国	3. 19~4. 2	筋肉収縮に関するEMBOワークショップ出席及び生物物理学に関する研究連絡のため

#### 4 月

植物	助教授	佐藤七郎	ドイツ連邦共和国、オーストリア、連合王国、オランダ、スウェーデン	4. 8~5. 8	第2回国際共生細胞生物学会議出席及び研究連絡のため
地物研	助教授	飯島健	アメリカ合衆国	4. 4~6. 1	磁気圏電流に関するチャップマン会議出席及び磁気圏物理学に関する研究連絡のため
地物	教授	永田豊	中華人民共和国	4. 10~4. 27	大陸棚特に東シナ海における堆積に関するシンポジウム出席及び東シナ海の海洋物理学研究のため
動物	講師	佐藤真彦	ドイツ連邦共和国	4. 10~59. 2. 9	ヒキガエル摂食行動の神経機構の研究のため
物理	教授	有馬朗人	イタリア	4. 1~4. 10	エリーチェ原子核物理国際学校出席及び原子核物理に関する研究連絡のため
情報	助手	山口和紀	アメリカ合衆国	4. 18~4. 28	幾何モデル化シンポジウム出席及びソフトウェア技術討論のため
情報	教授	國井利泰	アメリカ合衆国	4. 18~4. 28	幾何モデル化シンポジウム出席及びソフトウェア技術討論のため
物理	教授	宮本健郎	オーストリア、ドイツ連邦共和国	4. 9~4. 23	IAEA・INTORワークショップII A第7セッション出席及び核融合に関する日欧共同研究打合せのため
地物研	助手	岩上直幹	アメリカ合衆国	4. 2~5. 4	大気球による大気観測のため
化学	教授	黒田晴雄	中華人民共和国	4. 15~4. 24	新しい有機半導体及び有機光電導体の物性化学の研究実施のため
地物研	助教授	小川利紘	アメリカ合衆国	4. 20~5. 8	大気球による大気観測のため
物理	助教授	矢崎紘一	アメリカ合衆国	4. 27~5. 7	デルタ原子核力学シンポジウム出席及び原子核理論に関する共同研究のため
物理	助教授	釜江常好	アメリカ合衆国	4. 25~5. 15	電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験のため

## 昭和58年 3月28日卒業者氏名

### 数 学 科

田 河 一 郎	五十嵐 久 和	伊 東 裕 也	小 川 瑞 史
桂 田 祐 史	坂 口 勝 彦	田 中 康 彦	辻 井 敦 敦
寺 田 至	福 田 敬	松 澤 淳 一	三 森 謙 次
宮 崎 桂	穴 澤 禎 一	岩 崎 克 則	内 山 啓 示
江 下 雅 之	尾 崎 孝 良	大河内 俊 夫	大 鹿 健 一
岡 安 隆	金 子 昌 信	川 崎 研 一	大 鋏 田 政 人
小 谷 元 子	後 藤 裕	坂 田 雅 一	庄 司 功 雄
田 中 宏 一	高 橋 豊	谷 川 幸 永	塚 田 春 俊
戸 瀬 信 之 行	土 肥 克 俊	野 地 祐 二	野 間 居 聡
野 呂 正 彦	橋 本 剛	兵 頭 治	
藤 木 雅 彦	吉 田 幹 雄		

(42名)

### 情 報 科 学 科

坂 部 征 典	直 江 秀 憲	山 本 哲 也	安 里 彰
五十嵐 稔 行	小野寺 民 也	大 澤 範 高	岡 留 剛
佐 伯 慎 一	笹 川 留 美	建 石 由 佳	玉 木 彰
鳥 谷 浩 志	藤 村 希 久 雄	細 谷 睦	松 為 彰
森 下 真 一			

(17名)

### 物 理 学 科

伊 藤 真 之	潮 田 明	太 田 誠	大 塚 文 雄
大 苗 敦	小 林 健 一 郎	柴 啓 明	瀧 田 正 人
橋 本 康 宣	廣 瀬 恵 子	前 田 一 夫	松 竹 龍 之 輔
村 上 弘	天 野 薫	伊 藤 浩 之	伊 藤 領 介
伊 庭 幸 人	池 上 敬 一	石 田 浩	磯 健 一
稲 本 直 太	岩 田 郁 雄	太 田 洋	岡 田 明
奥 出 信 一 郎	金 箱 和 範	龜 井 真 一 郎	河 合 俊 哉
北 村 豊	小 池 裕 司	小 室 敏 雄	腰 原 伸 也
佐 野 弘 和	酒 井 広 文	貞 廣 茂 樹	重 原 孝 臣
白 石 賢 二	炭 井 谷 俊 樹	仙 場 浩 一	田 村 裕 和
高 須 昌 子	竹 内 建	鶴 秀 生	寺 井 章
寺 北 勝 司	戸 張 敦 貴	中 島 雅 之	西 田 研 一
長 谷 川 修 司	花 田 暢	平 島 大 樹	町 田 慎 二
松 尾 泰		松 本 直	味 園 真 司



水谷 巨	向井 浩二	森本 卓夫	矢作 裕紀
吉田 広行	吉本 誠司	米山 満	秋葉 俊彦

(64名)

天文学科

五十嵐 丈二	小林 正紀	中川 貴雄	仲谷 真吾
森澤 勝郎	渡部 潤一	坪井 昌人	

(7名)

地球物理学科

深川 泰介	稲葉 清高	太田 和夫	乙訓 高
門倉 昭	木村 隆之	鈴木 靖	瀬古 勝基
中込 緑	中西 幹郎	仲達 修一	長谷川 直之
橋口 能明	福森 一郎	堀 尚子	矢藤 滋

(16名)

化学科

豊田 義博	阿波賀 邦夫	荒谷 介和	池田 洋
上坂 友純	海野 雅史	小澤 芳樹	小貫 敦子
尾関 智二	大倉 康幸	大林 千絵	岡田 尚子
岡本 裕巳	片山 泰之	上岡 晃	久保 謙哉
栗原 和夫	児玉 安正	小林 修司	齋藤 努樹
鈴木 睦三	染田 清彦	田崎 真司	高井 正樹
武田 道夫	津留 浩恵	都築 誠二	都築 竜二
塚原 次郎	鳥羽 誠	富森 浩二	豊田 耕三
中井 俊一	間庭 直美	松澤 孝浩	宮地 克明
武藤 雅之	森川 敏樹	森田 俊存	由良 毅
湯澤 洋二郎	横川 善之	横山 利彦	米元 勝己
渡邊 智子			

(45名)

生物化学科

井川 俊太郎	石川 雅敏	石川 雅之	岩澤 律夫
岩根 理	植月 太一	遠藤 聡史	大島 潔
加藤 廉	小林 久男	仙波 憲太郎	滝澤 敏雄
塚本 忠	中村 昌樹	橋本 真	堀江 信之
武藤 裕	吉村 伸		

(18名)

生物学科 (動物学課程)

大岩 和弘	小森 利彦	櫻井 武司	早坂 謙二
-------	-------	-------	-------

林 謙 介	林 行 秀	原 かおる	廣 中 規 子
米 村 重 信			(9名)

生物学科 (植物学課程)

藤 井 明 啓	大 西 浩 平	川 岸 郁 朗	下河原 浩 介
杉 山 宗 隆	中 尾 俊 史	綿 野 泰 行	(7名)

生物学科 (人類学課程)

越 智 典 子	石 井 千賀良	内 田 亮 子	木 村 文 隆
			(4名)

地学科 (地質学・鉱物学課程)

山 北 聡	有 山 智 雄	飯 塚 博 之	大 塚 文 哉
加 藤 隆	塩 田 哲 也	菅 原 利 行	高 山 邦 明
野 坂 徹	本 江 誠 治	松 田 博 貴	山 内 孝 志
山 崎 衛	渡 邊 秀 弘		(14名)

地学科 (地理学課程)

西 野 哲 史	良 永 一 宏	伊 藤 聡	小 菅 範 幸
篠 田 雅 人	瀬 戸 川 毅	高 田 将 志	長 田 博 文
			(8名)
			(合計 251名)

昭和58年3月29日大学院修士課程修了者氏名

数 学

木 村 宏 一	高 瀬 邦 彦	岩 瀬 順 一	上 野 一 男
川 村 明	後 藤 寿 史	清 水 富 門	神 保 秀 一
杉 田 隆	玉 乃 井 広 臣	丹 原 大 介	中上川 友 樹
原 岡 喜 重	深 谷 賢 治	藤 原 靖	松 本 久 義
矢 神 毅	山 崎 昌 男	山 本 昌 宏	横 山 和 弘
			(20名)

情報科学

齋 藤 明	桜 井 貴 文	清 水 徹	橋 田 浩 一
和 田 孝			(5名)

物 理 学

明 石 榎 川 久 須 鈴 高 富 中 真 森	樂 原 本 田 崎 我 藤 木 田 河 原 鍋 松	浩 照 良 隆 隆 康 洋 有 幹 昌 治	史 也 治 章 猛 弘 靖 夫 一 博 晴 彦 治	有 岩 大 梶 木 小 杉 住 高 富 中 前 安	賀 橋 和 田 村 林 田 山 梨 谷 嶋 島 田	正 壯 雅 芳 道 昭 弘 光 真 幸 修	享 憲 一 稔 文 真 昭 彦 毅 良 澄 彦 修	石 上 大 勝 北 佐 鈴 田 高 内 中 三 山	川 田 熊 本 谷 藤 木 中 柳 藤 村 武 田	隆 夫 建 信 英 慎 一 繁 和 正 伸 俊	石 内 大 川 北 柴 鈴 田 坪 永 細 水 渡	橋 山 原 越 村 田 邊 山 江 井 谷 刃	晃 一 郎 以 実 薰 理 由 透 文 夫 郎 樹
-------------------------	---------------------------	-----------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	-----------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	-------------------------	---------------------------	-------------------------	---------------------------

(52名)

天 文 学

石 林	橋 史 正	朗 彦	戎 嶺	崎 俊 重	一 慎	楠 瀬 正 昭	種 純 一 郎
-----	-------	-----	-----	-------	-----	---------	---------

チャールズ・  
モーガン

(7名)

地球物理学

浅 限 高 星 矢 田 部	岡 健 昌 野 真 學	達 一 弘 弘 學	今 給 黎 哲 郎	給 黎 哲 郎	今 給 黎 哲 郎	小 鈴 中 三 川 川 敏 一 均	小 田 林 道	川 隆 一 介 豐
---------------	-------------	-----------	-----------	---------	-----------	-------------------	---------	-----------

(18名)

化 学

伊 安 小 加 佐 關 中 長 松 魏	藤 香 川 藤 藤 野 谷 川 尾 磊	久 章 千 久 金 浩 登 久 磊	司 織 夫 尋 子 一 二 志 夫 昭 磊	山 石 大 久 坂 田 西 橋 見 刘	下 渡 平 米 倉 島 田 本 附 刘	仰 俊 学 博 康 之 也 哉 孝 平	朝 市 折 黒 坂 富 葉 古 山	倉 川 山 沢 元 田 賀 野 内	清 淳 剛 夫 三 爾 徹 郎 繁	高 士 剛 夫 三 爾 徹 郎 繁	有 海 加 小 鈴 鳥 長 曲 山	賀 塩 藤 松 木 山 谷 川 内	哲 健 淳 憲 博 剛 泰 明 薰	也 一 一 一 之 剛 泰 明 薰
---------------------	---------------------	-------------------	-----------------------	---------------------	---------------------	---------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------

(38名)

生物化学

岡田大助	加藤宏幸	柏崎安男	金児知子
神田大輔	白澤幸生	高松信彦	竹内康裕
外山玲子	原三紀	藤原晴彦	正井久雄
松井泰	三箇山俊文	山谷純	若松馨
渡辺雄一郎			

(17名)

動物学

秋元義弘	大和田隆	楠真琴	鈴木純
谷口泰史	橋本有弘	松島俊也	

(7名)

植物学

飯田章博	岡崎芳次	岡村正愛	加藤潤一
梶江慎一	神田東作	竹中明夫	館野正樹
森安裕二			

(9名)

人類学

三隅克美	針原伸二		
------	------	--	--

(2名)

地質学

海野進	大路樹生	神谷隆宏	津久井雅志
中野俊	前田晴良	松田文彰	渡部芳夫

(8名)

鉱物学

平松美喜雄	尾形潔	小暮敏博	澤田晴朗
中西健司			

(5名)

地理学

佐藤哲夫	奥村晃史	川口太郎	仁科淳司
山田晴通	渡邊満久		

(6名)

相關理化学

石田信宏	岩田普	岡本俊明	長田寛
亀島伸朗	川原順一	北川悟	絹川亨
木下健生	小林洋一	近藤智	近藤真通
斎藤知哉	酒井充	中野達雄	林英之
藤井伸平	前田修	安永正	肆矢雄三

渡 辺 紳一郎

(21名)

科学史・科学基礎論

梅 田 淳

勝 守

真

八 耳 俊 文

吉 本 秀 之

(4名)

(合計 219名)

理学博士の学位授与者

[昭和58年3月14日付 (12名)]

専門課程	氏 名	論 文 題 目
物 理 学	井 上 恒 一	固体ネオンアルゴン及びクリプトンにおける電子励起状態の緩和過程について — 実験的研究 —
地 球 物 理 学	新 野 宏	順圧不安定における有限振幅波の振舞に関する研究
人 類 学	高 山 博	モアレ縮写真法による日本人顔面頭蓋の形態学的研究
論 文 博 士	田 中 雅 彦	「 $(\alpha, {}^6\text{He})$ 反応の研究」 — 核分光学の新しい手段として —
同	西 野 栄 正	合弁花の花冠筒部形成についての比較研究
同	柿 谷 均	プレプロエンケファリンB cDNAの単離と構造解析
同	岡 本 彰 夫	Polymer Effects for Chemical Reactions in Polymer Solutionsの研究
同	田 島 文 子	余震域の時空分布並びに実体波の解析に基づく震源域の破壊過程に関する研究
同	大 隅 多加志	深海堆積物中のヘリウムの拡散
同	市 原 慶 和	ペプシノーゲン前駆体の同定とそのN末端シグナルペプチドの一次構造に関する研究
同	佐 藤 直 樹	光電子分光法による芳香族固体の研究 — 分極エネルギーと電子状態 —
同	足 立 暁 生	実際の計算可能性に向っての計算量理論

[昭和58年3月29日付 (82名)]

数 学	打 越 敬 祐	不確定特異点型偏微分作用系の超局所解析
同	木 村 弘 信	2次元ガルニエ系の退化とその多項式ハミルトン構造について
同	中 根 静 男	多重特性を持つ偏微分作用素に対するCauchy問題の一意性と非一意性

専門課程	氏名	論文題目
数 学	三 好 透	(K, l, m) - ストリングに付随する d 次元値ガウス定常過程と $(\alpha, \beta, \gamma, \delta)$ - ランジュヴァン方程式について
物 理 学	稲 葉 豊	揺動媒質中の量子散乱と拡散
同	小 口 多美夫	バンド計算に基づく遷移金属及びその酸化物での磁気相互作用の研究
同	川 合 光	Large-N ゲージ理論における自由度の reduction
同	源 間 信 弘	II - IV 族及び III - V 族半導体の遷移金属不純物の電子状態
同	小 磯 晴 代	入射運動量が 690 から 840 Mev/c 領域の $K^- + P \rightarrow \Sigma^+ + \pi^-$ 反応の研究
同	小 森 文 夫	金属薄膜における局在と相互作用の効果の実験的研究
同	崎 本 一 博	イオン・分子の低エネルギー衝突
同	笹 川 文 義	乗法的確率過程における臨界緩和の研究
同	島 宗 裕 次	ゲージ模型とマトリックス模型の Large-N Limit について
同	新 上 和 正	化学吸着における電子格子相互作用の効果と吸着子荷電
同	滝 川 仁	希土類化合物における価数揺動状態の核磁気共鳴による研究
同	竹 森 直	アンダーソン局在相における電子間相互作用
同	田 子 一 農	縮退電子液体の動的相関構造の解析
同	谷 口 敬	$K^+ \rightarrow \mu^+ \nu$ 崩壊による重いニュートリノの検出
同	辻 俊 二	JIPPT - II トカマクにおける軟 X 線映像法によるディスプレイの研究
同	豊 島 近	アクチン・トロポミオシン・ミオシンサブフラグメント 1 複合体の三次元画像解析
同	長谷川 泰 正	超流動 $^3\text{He}$ における多重スピネコーの理論
同	阪 東 寛	量子的電流磁気効果によるビスマス中の散乱過程の実験的研究
同	日 笠 健 一	反応 $e^+e^- \rightarrow Z\gamma$ におけるヤン-ミルズ場 3 点相互作用の検証
同	深 川 洋 一	超伝導微粒子の NMR 諸量に対するスピン軌道相互作用の効果
同	古 野 泰 二	X 線小角散乱法による $\text{H}^+ - \text{ATPase (TF}_1)$ の構造の研究
同	松 山 晶 彦	有効 $\Delta N$ 相互作用による $A(\pi, N) (A-1)$ 反応
同	山 田 章 夫	応力変調法によるアルカリハライドの電子状態の研究
同	吉 田 宣 章	相互作用するボゾン模型による高スピン状態

専門課程	氏名	論文題目
物理学	和田 尚志	極性分子の衝突による回転遷移と輸送現象
天文学	竹田 洋一	疑似金属線星小狐座15番星の分光学的研究
同	常田 佐久	「ひのと」衛星搭載のX線望遠鏡による太陽フレアの観測
同	野口 正史	楕円銀河の形成の数値シミュレーション
同	吉田 春夫	代数的第1積分存在のための必要条件
同	渡辺 正明	銀河の大局的構造の定量解析
地球物理学	今井 博	火山噴火機構の研究 — 浅間火山1973年及び1982年の噴火活動に関するケース・スタディ
同	佐藤 博樹	はんれい岩及びカンラン石の低周波交流インピーダンス測定 — 特に部分熔融及び点欠陥構造の研究について
同	蘇 鮮 燮	梅雨期における積雲対流の役割についての解析 — 特にアラカワ・シュバート積雲パラメタリゼーションに関して —
同	中田 正夫	後氷期隆起・沈降運動, 及び表面波高次モードより推定されるマンツルのレオロジー
同	落 沢 朗	地球物理学上重要な物質についてのX線その場観測法を用いた, 高压高温下における相平衡研究
同	本 多 了	島弧下の熱過程及びマンツル対流に関する2-3の問題
化学	家 近 泰	有機分子性結晶の反射スペクトルの温度依存性
同	板 垣 秀 幸	光励起状態をプローブとした高分子側鎖の芳香環の相互作用
同	上 栴 勇	ホフマン型包接化合物におけるゲスト種の挙動
同	大 島 茂	電子衝撃によって生成する長寿命電子励起状態の原子および分子の検出
同	柿 崎 文 彦	9-ジメチルアミノエテノアントラセンN-オキシド類の炭素-窒素単結合に関する回転障壁
同	斉 藤 茂 樹	共役ポリエチン分子の振動スペクトル
同	杉 田 教 文	合成金属錯体の制ガン性と構造
同	鈴 木 啓 介	光学活性アルコールの立体選択的合成法の開発及びその糖類合成への応用
同	高 橋 正	高伝導性有機固体の磁気的性質
同	千 葉 光 一	マイクロ波誘導ヘリウムプラズマによる元素選択性ガスクロマトグラフ検出に関する研究
同	中 塚 隆	$\beta$ -ヒドロキシ- $\alpha$ -アミノ酸及び糖類の合成法の開拓研究
同	根 岸 良 夫	リン及び硫黄原子の特性を利用した複素環化合物の合成

専門課程	氏名	論文題目
化学	松尾基之	散乱電子メスbauer分光法による固体表面の分析に関する研究
生物化学	石野史敏	大腸菌における細胞分裂、形態形成の研究 — 細胞の伸長・桿菌形態形成、細胞分裂に分化したペニシリン結合タンパク質の酵素活性について —
同	坂谷光泰	RNase T <sub>1</sub> 触媒反応の定常状態速度論的研究：— 触媒様式の多様性
同	植村浩	Col Ib プラスミドによるB F 23ファージの増殖阻害に関する研究
同	榎森康文	2本鎖RNAバクテリオファージφ 6の複製過程に関する研究
同	菊池尚志	大腸菌ファージB F 23感染菌における遺伝子発現の逐次的制御
同	熊谷博道	カルモジュリンと微小管蛋白の相互作用の研究
同	栗原達也	λファージの抗転写終結機構に於ける大腸菌Nusa蛋白質の機能に関する研究
同	渋谷況子	ラット転移RNA遺伝子の構造解析
同	内藤哲	コリシンE 1レプリコンに於ける複製開始機構の研究
同	野元裕	ニワトリ卵白アルブミンとニジマス卵ポリシアロ糖タンパク質の糖鎖構造の研究
同	丸山和夫	S V 40トランスホーム細胞とその正常型復帰変異株の性質
同	柳沼克幸	ラットミトコンドリアDNAの複製開始部位の構造と複製開始に関する酵素の研究
動物学	上村慎治	ウニ精子鞭毛における微小管の滑り運動の力学的研究
同	小路武彦	In vitro 及び in vivo 系における肝細胞DNA合成の調節機構
同	塩尻信義	マウス胚における成熟肝細胞と肝内輸胆管細胞の分化
同	松下晋	消化管間充織存在下における尿嚢内胚葉の分化 — 刷子縁抗原及びシュクララーゼの出現
同	最上善広	カルシウムイオンによる繊毛運動の調節
植物学	井上健	日本及び近隣地域のツレサギソウ属 (ラン科) の送粉と分類
同	岡本進	<i>Saccharomyces cerevisiae</i> の分裂中心の遺伝学
地質学	小沢一仁	東北日本北上山地宮守超苦鉄質岩体の地質と熱履歴
同	孔栄世	相模湾の海底地質構造
同	巽好幸	沈み込み帯における初成マグマの成因
同	永原裕子	コンドリユールの成因に関する岩石学的、実験的研究
同	前川寛和	低温高圧型変成地域の堆積作用、変成作用及びテクトニクス：神居古潭中部地域と母体層群について



専門課程	氏 名	論 文 題 目
相 関 理 化 学	菊 地 慶 祐	Euler 方程式の外部問題
同	岸 浩一郎	制ガン抗生物質サフラマイシンAの作用機作に関する研究
同	北 原 滋 久	Aspergillus niger var macrosporus由来の Acid Proteinase Aの酵素学的研究
同	馳 澤 盛一郎	バクテリア・スフェロプラスト導入による植物プロトプラストの形質転換系
同	藤 本 佳 久	可算個の変数を持つ正則函数

あなたです！

火事を出すのも

防ぐのも

## 編集後記

本号は化学新館の特集号のような形になりました。次号からは、主として2号館関係の内容。表紙用としては、このほかにも化学新館の写真を用意していたのですが、学内公報に先取り(?)されてしまったので、重複しないものを用

待下さい。 (尾本)

\*\*\*\*\*  
\*  
\* ◎泥棒がねらっている (盗難注意) !  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*\*\*\*\*

本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで泥棒 (盗難) の被害にあっています。あなたのちょっとした注意で被害をくいとめられます。

～最近被害続出～

---

### 編集:

矢崎 紘一 (物理)	内線	4 1 2 3
松野 太郎 (地物)		4 2 9 9
露木 孝彦 (化学)		4 3 5 7
田賀井 篤平 (鉱物)		4 5 4 4
尾本 恵市 (人類)		4 4 8 2

---